

第1章 韓国武芸の歴史

韓国¹の武芸はいつどこで始まったのであろうか。そして、それはいかなる形においてであったのか。そのことに関しては未だ一致した意見がなく、研究者によって異なっている。

だが、この一致しない意見の中でも多く見られるのが、武芸が自然発生的に起こったという考えである。

原始時代に生存のため本能的に行われた動物と人間の格闘が今日の武芸となった²。すなわち、原始人の走る、跳ぶ、投げるといった日常的な動作に打つ・撃つなどを加えて素手武芸が始まったというものである³。そして、素手武芸に加えて弓や剣、刀、矛などの武器が開発されることによって武器武芸も自然に発達することになったと考えられている⁴。

また、このような原始的な武芸は、社会が古代部族国家へと進展していく中で、体系化していったという⁵。『韓国体育史⁶』では、中国の文献をとりあげ朝鮮半島に起こった部族国家の武芸について（特に武器武芸）次のように説明している。

『三国志 魏志東夷伝 扶餘條』

「弓・矢・刀・矛を兵器とし、個々の家には鎧杖があった」

『後漢書 東夷伝 挹婁條』

「勇猛で、陰山でも弓は上手く、当たらないものがない」

『後漢書 東夷伝 濊條』

「歩戦が上手く、数人がそれぞれ3丈の長矛を手にし、共同に戦った。楽浪

¹ 韓国（正式には大韓民国）は1948年からの国号である。それ以前は時代によって異なった名称で呼ばれたが、本稿では、その全ての時代を韓国の歴史として取り上げる。そして、現時点の記述は韓国あるいは韓国武芸を用いるが、過去の時代に対する記述では、当時の名称を使う。また、現代の韓国に対する記述には北朝鮮は含めない。

² ジャン ゼイ、イ ゼハク、「韓国武道の諸定立に関する研究」、大韓武道学会誌、7(2)、2005、p.95

³ ジョン サムヒョン、「韓国武芸史研究」、韓国体育学会誌、35(4)、1996、p.14

⁴ ジュン サムヒョン、前掲書、p.23

⁵ ジュン サムヒョン、同書、pp.23~24

⁶ 羅絢成、『韓国体育史』、教学研究社、1995、pp.23~24

の壇弓も濊地から生まれた」

こうした古代の部族国家では、弓・矢・刀・矛・槍・弩などの武器が使われた。また国家防衛のために、国民一人一人が武芸を練習する「兵農一致」も自然発生的に生まれ、ここでは射術と剣術が武芸の中心であったことも述べられている⁷。

このように韓国武芸の起源については、素手武芸から武器武芸へと発展し、社会が部族国家へと変わる中で、洗練されていたという説が一般的である⁸。

本章では、こうした起源・発達論には立ち入ることせず、韓国武芸の歴史を、時代を追って概観しておく。そしてその際、現在伝統武芸という名で行われている武芸種目に注目する。

第1節 韓国における軍事武芸

韓国においては、古文献に記された武芸はそのほとんどが軍事関連のものである。そして、その種類は弓術、槍術、騎射、角抵、手博などであり、古文献には勇力、武器、兵法、戦術、戦略、兵書、武士、戦闘、巡狩、講武などの語が軍事の文脈で多く用いられている⁹。

1. 三国時代の武芸

三国（高句麗・百済・新羅）時代は紀元1世紀から7世紀までをいう。今日、三国時代とそれ以前の武芸に関する直接的な資料は極めて少ない¹⁰。

⁷ 羅絢成、前掲書、p.23

⁸ 韓国武芸については B.C.7179 年の桓国時代から始まったという説もある。韓国では資料が少ないことが理由として武芸の研究の多くが三国時代（高句麗・百済・新羅）から行われているが、『韓国上古武芸史』では『三国遺史』（1145）や『桓檀古記』（1911）などの古文献から我が国の武芸は桓国から始まり、まず内的な気の修行によって心身鍛錬を行い（治身得道）それが外的な武芸にもつながったと述べている。高東永、『韓国上古武芸史』、한뿌리、1993

⁹ 国立民俗博物館 1、『韓国武芸史料総書 1』、2004、p.9

¹⁰ 『韓国武芸史料総書』（国立民俗博物館）は現時点で確認できる史料から、武芸に関する用語や内容をまとめたもの

だが、現存する記録からは、武芸を「止戈之芸¹¹⁾ (『太子寺朗空大師白月栖雲塔碑』: 954) と記したことや新羅の剣術を「擊劍¹²⁾」と呼んだこと、剣術の修練によって「国仙」(花郎の階級のこと) になったことなどが記されている。そして、軍事訓練の一環として大闘、觀射、巡幸、巡狩、田獵などが行われており、年代不明であるが新羅には『安国兵法』という兵法書も存在していた¹³⁾。

そして中国の史料にも、その時期の朝鮮半島の武芸について記述したところが多数見られる。そこには、韓民族を多勇力・尚氣力であって、善射・善馬・能歩戰・便持矛步戰・重騎射・便鞍馬・便乗船・習戰闘¹⁴⁾など、体格や氣質、また兵器の運用において優れている

である。このため本研究では、これをもとに韓国武芸の古代史を論じることとする。

三国時代の資料として用いられた史料は、韓国文献『三国史記』、『三国遺事』、『花郎世紀』、『桂苑筆耕』、『孤雲文集・続集』、『金石文』の6冊である。中国文献『史記』、『漢書』、『後漢書』、『三国志』、『晋書』、『宋書』、『南齊書』、『梁書』、『南史』、『魏書』、『周書』、『隋書』、『北史』、『舊唐書』、『新唐書』、『山海經』、『論衡』、『孔子家語』、『說苑』、『三国会要』、『五代会要』、『翰苑』、『李衛公問對』、『武經總要前集』、『通典』、『通志』、『太平御覽』、『冊府元龜』、『太平寰宇記』、『文獻通考』、『資治通鑑』、『渤海国志長篇』などの31冊である。そして、日本の文献『日本書紀』、『続日本紀』、『日本後紀』、『続日本後紀』、『日本文徳天皇実録』、『日本三代実録』、『入唐求法巡礼行記』である。

¹¹⁾ 韓国金石文総合映像情報システム、<http://gsm.nricp.go.kr>、2010年10月10日

「父諱佩常年登九歲學冠三冬長牽投筆之心仍效止戈之藝所以繫名」

¹²⁾ 『花郎世紀』、「時比助公子文弩亦豪傑善擊劍」・「年十二從文弩 能擊劍 好愛人 有渠父之風」「公自幼善擊劍好義氣」

¹³⁾ 国立民俗博物館 1、前掲書、pp.9~10 『三国遺史』

¹⁴⁾ 『後漢書』卷 85、東夷列伝、第 75、「挹婁 古肅慎之國也・・・自漢興已後 臣屬夫餘 種衆強少 多勇力 処山險 又善射・・・」

『梁書』卷 54、列伝、第 48、「高句麗者 其先出自東明・・・國人尚氣力 便弓矢刀矛 有鎧甲 習戰闘・・・」

『後漢書』卷 85、東夷列伝 第 75、「能歩戰 作矛長三丈 或數人共持之 樂浪壇弓出其地」

『通志』、卷 194 百濟、「兵有弓箭刀稍 俗重騎射 兼愛墳史」

『通典』、卷 185、「辰韓・・・便歩戰 兵杖與馬韓同」

『通志』、卷 194、高句麗、「高句麗・・・仕宮有勇力 便鞍馬善獵射」

と表現している¹⁵。

さらに日本の文献においても当時の朝鮮半島における武芸に関する情報を確認できる。例えば高句麗が日本の仁徳天皇12年（324）に鉄で造った盾と的を天皇に捧げた（『日本書紀』、巻11、大鷦鷯天皇 仁徳天皇、「十二年秋七月辛未朔癸酉 高麗国貢鐵盾鐵的」）¹⁶という記事があり、当時高句麗には鉄の製品が作られたことが説明されている。

この三国時代の武芸の特長は、武治主義や尚武精神が強調され、実践に備えた戦闘技が勧められたことによって、弓術を始め騎馬術、剣術、槍術、斧鉞術、弩術、角抵、蹴鞠、石戦などの武芸が発達したことである。特に高句麗は騎馬術と「貂弓」をもとに、周辺民族である東濊と肅慎の「壇弓」と靺鞨の「角弓」を吸収することによってより高い水準に至るようになった。また騎兵術や弓術と同時に歩兵の剣術と長矛を中心とした長槍術も発達した¹⁷。

その後、三国時代は、高句麗と百済を滅ぼした新羅による統一時代（676）を迎えるが、残念ながら統一新羅の時期については武芸に関する資料は見られない。

2. 高麗時代の武芸

高句麗の後継者を名乗る「高麗」が統一新羅に代わって935年に半島を統一した。

高麗は高句麗の末裔であったため、その武芸も高句麗のものを受けついでいた。高麗は国を安定させるために、従来の武治主義から文治主義へと政治理念を改めたが、対外的には渤海の滅亡（926）により北方民族に対する脅威が高まったため、国防を優先とする戦略が強化された。

それ故、国境の城壁や山岳地域では戦闘に有利な遠隔戦が展開され、その結果、弓術、弩術、騎射術などが発達した。弓科を設置して人材を選抜し、弓と弩を定期的に練磨した記録があるように¹⁸、弓と弩は重要な武器として重んじられていて、特に弩については繡質弩、八牛弩、繡質九弓弩などいくつもの種類が存在した。また撃毬、打毬、騎射、馬戯な

¹⁵ 国立民俗博物館 1、前傾書、p.10

¹⁶ 国立民俗博物館 1、同書、p.10

¹⁷ 国立民俗博物館 1、同書、p.11

¹⁸ 『高麗史』、巻 81、「九月 有司講 衣前例 習射繡質九弓弩於南郊 従之」

ど、騎馬術に関する武芸種目も見られる。

しかし、その反面、歩兵戦に関する記録がごくわずかであることから、歩兵の主要な武術である剣術や槍術は比較的の後退したと考えられる¹⁹。

また、高麗時代に現れるのが手搏（文献によっては手博）と記される武芸である。これは素手武芸として知られており、武人の実力をテストする手段であって、「五兵手搏戯」という武術訓練の一環として発展したものと考えられる²⁰。

また、角戯、角力、角觥、角觥戯、角力戯という現在の相撲と思われる武芸もこの時期に現れている。勇者、壯者などの語も相撲に関する人の記録として残っている。この相撲は軍事訓練にもまた王の観戦のためにも行われた²¹。

このように高麗時代にあっては、弓と弩を使う遠距離武芸がより発展し、剣や槍などを使う白兵戦武芸は弱体化したと考えられる。

3. 朝鮮時代の武芸

高麗の後1392年に建国された「朝鮮」は、韓国武芸研究に大きな意味をもたらした。以前の諸時代とは異なって、この時代から武芸に関する多くの資料や遺物が確認されるためである。

朝鮮時代は高麗時代に行われた手搏、弓射、剣術、槍術、角觥、騎馬などの武芸のほとんどが継承された。そして兵士の選抜では手搏、騎射、歩射、走徒力、腕力が試され、優れた者を優先した。特に手搏は国王と王室の護衛に必要な兵士の武芸として重んじられた。王の近衛兵を置くのは資料的にはこの時代のことである²²。

朝鮮社会は中央集権的な官僚体制であったため、武芸は支配層の統制管理下に入り、国防軍事と密接な関係を結んでいった。高麗の末に登場した火器（大砲）によって従来の弓や槍剣術の比重は小さくなったが、弓は火器を補うものとして評価され、朝鮮前期には弓

¹⁹ 国立民俗博物館 2、『韓国武芸史料総書 2』、2004、pp.9~10

²⁰ 国立民俗博物館 2、前掲書、p.10

²¹ 国立民俗博物館 2、同書、p.10

²² シン ヨンホ、「韓国武芸変遷史研究」、又石大学校大学院博士論文、2007、pp.143~144

と火器を中心とした遠隔戦が専ら行われた²³。

弓（特に騎射）は武官選抜の科目として多く使われたが、槍や剣などの近接武器はその重要性が低くなり、剣術は武挙の試験からも外された²⁴。

朝鮮中期の「壬辰倭乱」（1592～1598）（文禄・慶長の役）は朝鮮武芸史上の転換点であるとされる。

高麗の末に大砲はすでに存在していたが、壬辰倭乱中に1人で扱える鉄砲が登場し、その結果、長い間維持されてきた弓術・騎馬術戦法を崩壊させた。また日本軍の鉄砲と剣を使った戦法に対応できなかった朝鮮軍は近接戦術の重要性を実感し、鉄砲と共に再び接近戦で使う剣と槍の技術を復活しようとした²⁵。

そこで戦争中にも関わらず朝鮮王朝は中国の『紀效新書』に記された近接武器（棍、牌、狼筈、長槍、鈚、剣）を導入した。そして、1598年にはそれらの武器とその操作法を記した『武芸諸譜』を編纂した。その後、兵器の数を加えて1610年には『武芸諸譜翻訳続集』、1759年には『武芸新譜』、1790年には『武芸図譜通志』を刊行した。こうして近接戦技はより体系化されていった。

しかしその後、19世紀に入り新式火器と近代式軍隊が導入されることによって、それまで行われていた近接戦技はその力を失うことになった²⁶。

その反面、弓術、相撲、槍術、剣術、テッキョンなどの近接武芸は民間に移り、護身、修身、娯楽のための文化として発展し、民間風俗として定着してゆく²⁷。

4. 近代期の武芸

韓国の近代は、19世紀半ばから、日本支配から解放された1945年までをいう²⁸。この時期は新しい西洋文明が多く入ってきた時期であるが、日本の殖民地になったことで、社会・

²³ 国立民俗博物館 4、『韓国武芸史料総書 4』、2005、pp.5~6

²⁴ 国立民俗博物館 4、前掲書、p.6

²⁵ 盧永九、「朝鮮後期短兵戦術の推移と「武芸図譜通志」の性格」、震檀学報 91、2001、pp.358~359

²⁶ 盧永九、前掲書、pp.359~365

²⁷ 国立民俗博物館 4、前掲書、pp.8~9

²⁸ 国立民俗博物館 12、『韓国武芸史料総書 12』、2007、p.6

文化が混乱した時期でもあった。

1876年日本との修好条約による開港と共に、朝鮮は西洋の先進文物を受け入れ新式軍隊を創った結果、従来の武芸は衰退することになった²⁹。さらに、1910年に日本に併合されたことによって、朝鮮の伝統文化は消失あるいは変容の危機にさらされた³⁰。武芸も例外ではなかった。

剣術、槍術、棒術、刀術、防牌術、馬上才、撃毬、騎射、騎槍、鞭棍、馬上双剣、石合戦など『武芸図譜通志』に収録された武芸のほとんどが衰退した。衰退は朝鮮後期から進行していたが、1907年に日本軍が強要した国軍の解散は、軍隊によって細々と維持されていた武芸を公式的に途絶えさせるきっかけになった³¹。

日本植民地下において伝来の武芸は、民間で行われ存続していた。

特に弓術は、近代式学校の運動会で行われ、部が形成されることになった。1920年代に「朝鮮体育会」が結成されると、それぞれの地域で角弓、木弓を用いた大会が盛んに開かれるようになった。そして、女性が参加するなどの変化も見られた³²。

また、シルムも弓術と同様人気があった。それまで地域ごとに左シルム、右シルム、帯シルムなどルールが違っていたが、試合の規模が大きくなるにつれて、ルールを統一する必要が生じ、その結果、左シルムに統一された³³。

しかし、格闘技の性格を持っていたテッキョンと手搏は、朝鮮総督部から敵視され発展できずに、少数者にのみ継承されていた³⁴。

この時代、外来の武芸が輸入されて行われるようになった。柔道、剣道を中心とした日本武芸が、朝鮮総督部によって警察と学校に導入され、また民間でも道場が開かれたことで、一般の人々も実践するようになった。この時、日本の武徳会が武芸大会を頻繁に開いたことも手伝って、日本武芸は急速に広まっていた³⁵。

²⁹ シン ヨンホ、前掲書、p.163

³⁰ シン ヨンホ、同書、p.169

³¹ 国立民俗博物館 12、前掲書、pp.6~7

³² 国立民俗博物館 12、同書、pp.7~8

³³ 寒川恒夫編著、『相撲の人類学』、第2章中国朝鮮族シルムの持続と変容、大修館書店、1995

³⁴ 国立民俗博物館 12、前掲書、p.8

³⁵ 国立民俗博物館 12、同書、p.12

興味深いのは、1929年10月に「中央基督教青年会」の張権が、当時の朝鮮日報に発表した論説で、柔道用語を日本語からハングルに直したことが知られている³⁶。これは柔道の1つの文化変容と見なしてよいものである。

また、ボクシングのような西洋格闘技も導入され、1928年11月27日の「東亜日報」の記事によると、「洋人拳闘対柔道 国際的対抗競技³⁷」のように、当時朝鮮人柔道有段者と西洋のボクシング選手との異種試合も行われた。

このように日本植民地時代には、外国から多くの武芸がもたらされたものの、これらを概念化し論じることは、未だ行われていなかった。

第2節 3つの武芸の史的検証

ここでは第2章以下で取り上げる3つの武芸について、その今日のそれぞれの伝承者が主張する起源説を史的に検証する。すなわち、第2章のテコンドーは手搏とテッキョンに起源を求め、第3章のテッキョンはテッキョンとして高句麗に始まったと主張している。そして、第4章の海東剣道は高句麗のサムラン（士武郎）たちが行った剣法にその起源を求めているのである。

1. 手搏

今日の多くの研究者は手搏を、武器を使わない素手武芸であると理解している³⁸。しかし文献史料と考古学的遺物によっては手搏がどのような武芸であったのかを明らかにすることは困難である。手搏についての史料は次のようである。

³⁶ 国立民俗博物館 13、『韓国武芸史料総書 13』、2007、p.391。「朝鮮柔道 20年」

³⁷ 国立民俗博物館 12、前掲書、p.405

³⁸ 陸泰安、「伝統武芸シュビョクチギの由来と技法に関する研究」、水原大学大学院修士論文、1994

ジャン ゼイ・イ ゼハク、前掲書

ソン イルファン他、「韓・中・日格闘武芸（手搏・相搏・相撲・角抵）に関する研究」、韓国体育学会誌 47(4)、2008

①『高麗史』卷19 毅宗24年 8月

『高麗史』卷128 列伝41 反逆鄭仲夫

「王が普賢院に行き、五門の前で侍臣を呼んで酒を飲んだ。宴が盛り上がると、王は左右を見て『素晴らしいところである。ここは兵法を練習するにふさわしい』といい、武臣に命令して五兵手搏戯をやらせた」

②『高麗史節要』卷25 忠恵王 後4年

「馬巖に出御して手搏を観た」

③『高麗史』卷36 世家36 忠恵王 後3年5月

『高麗史節要』卷25 忠恵王 後3年

「癸巳に賞春亭に出御して手搏戯を観た」

④『高麗史』卷128 列伝41 反逆李義旼

「李義旼は手搏に秀であり、毅宗より愛されたため隊正から別将になった」

⑤『高麗史』卷129 列伝42 反逆崔忠献

「客を集めて宴を開き、重房の力ある人に手搏をやらせてその勝者に賞を与えた」

⑥『高麗史節要』卷25 忠恵王 後4年

「王が狩を終え、和妃宮に戻って手搏戯を観た」

以上のように、手搏の内容は明らかではないが、手搏の名人とされた李義旼と杜景升について次のような記録が見られる。

⑦『高麗史』卷128 列伝41 反逆李義旼

「ある日、李義旼が杜景升に自慢話をもちだし、『ある男が力自慢を言うものだから俺がこうやって倒した』と言って、拳で柱を叩くと柱

が揺れた。そうすると杜景升も『ある日のことだが、俺が拳を振り回したら皆が逃げた』と言って壁を叩くと、拳が壁にめり込んだ・・・³⁹」

この記事からすると、手搏は拳による打突を用いた技を含んでいたことが考えられる。史料の現状では、手搏の内容理解については、この程度に止まっている。他方、考古学の遺物としてはこれまで高句麗時代に建造された「舞踊塚」と「安岳3号古墳」、「三室塚」に描かれた絵が参考とされてきた。

この絵には2人が対決する様子が描かれており、互いに手を出し合って攻防しているように見えるのである。多くの研究者⁴⁰とテコンドー・テッキョン関係者⁴¹は、この絵が手搏であると、あるいはまた、手と足を攻防に用いるテコンドー・テッキョンの絵であると見ている。

しかし、これらの壁画は文字情報を伴わないために古代における手搏と断定することは難しく、またテコンドー・テッキョンの図像であると主張する同競技の関係者たちの主張は、これらの競技の成立年代との整合性を伴わないため受け入れることは難しいと考えられる。尚、テコンドーに関しては先述したように次章にて詳しく論述することにする。

³⁹ 「一日義叟與杜景升同坐中書誇曰「某人自矜勇力吾擊仆之如此」遂用拳撞柱榱桷爲之動景升曰「某時之事吾以空拳奮擊衆皆奔潰」遂撞之拳陷於壁後義叟與景升坐省議事相失奮拳擊柱曰「爾有何功位在吾上」時人語曰「掖垣李杜密院孫金」或作詩嘲之曰「吾畏李與杜屹然眞宰輔黃閣三四年拳風一萬古」

⁴⁰ 芮庸海、「無形文化財調査報告書 102 号」、1973・任東権、「無形文化財調査報告書 146 号」、1982

シン スング「韓国武芸の歴史と特性」、軍史 43 号、2001

姜昶和『現代テコンドーの正体性考察』、昌原大学大学院修士論文、2005

キム ウォンギ、「韓国武道の歴史的考察」、韓国スポーツリサーチ 16(3)、2005

アン ジョンナム、「高句麗の古墳壁画に表れる武芸形態の調査研究」、龍仁大学大学院修士論文、2005

シン ヨンホ、「韓国武芸変遷史研究」、又石大学校大学院博士論文、2007

⁴¹ 大韓テコンドー協会、<http://www.koreataekwondo.org/>、2010 年 6 月 4 日

大韓テッキョン連盟、<http://www.76ktf.com/>、2010 年 6 月 4 日

また、朝鮮時代に入ると、『太宗実録』巻19に「兵曹は手搏戯で人を試した。3人を勝った者を防牌軍として採用した⁴²⁾」と記され、朝鮮時代には手搏が兵士を選抜する試験科目の1つであったことが判る。しかし、その内容については依然不明である。

また、時代を下るが1798年に李晩永が編纂した『才物譜』に、「手搏は今のシュビョク：슈빅と同じである」とあり、また1925年の『海東竹枝』では「手癖打」と書いて「スビョクチギ：수빅치기」と記されている⁴³⁾。

しかし、手搏は今日に伝承がなされていないため、その具体的内容を明らかにすることができない状況にある。



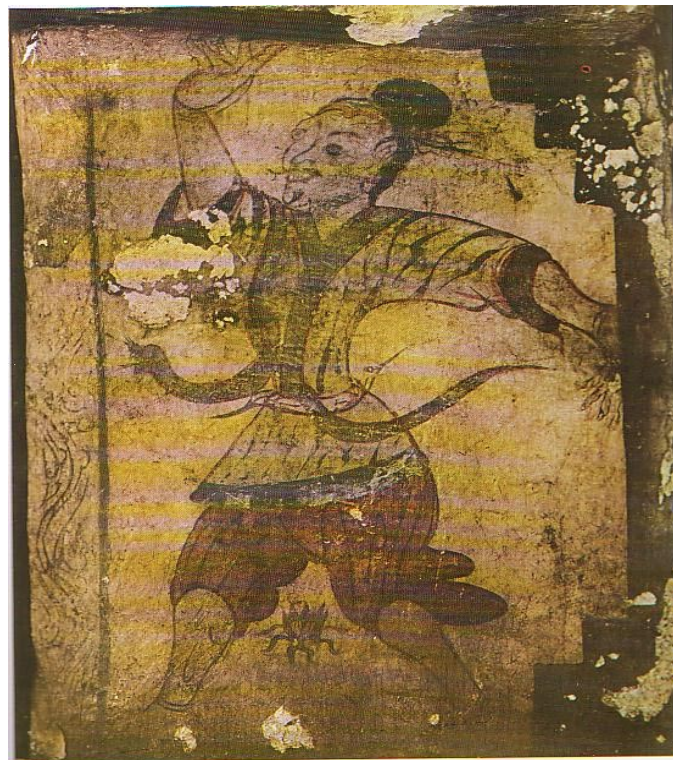
〈写真1〉高句麗「舞踊塚」の壁画

⁴²⁾ 『太宗実録』巻19 (1431) 「兵曹義政府 以手搏戯試人 補防牌軍 用勝三人者」

⁴³⁾ ホ インウク、『古い絵から合える我が武芸風俗史』、青い歴史、2005、pp.246~247



〈写真2〉 高句麗「安岳3号古墳」の壁画



〈写真3〉 高句麗「三室塚」の壁画

2. テッキョン

テッキョンは、1920年に朝鮮総督府が刊行した『朝鮮語大辞典』によると、「片足で、互いに倒す遊技、脚戯」と定義されている。また1991年の『我が言葉大辞典』には、「テッキョンあるいはテキョンと見られ、片足で互いに相手の脚を蹴って倒す競技、脚戯」となっている。そして、ブリタニカには「主に脚を利用して相手を蹴って倒す韓国伝統の素手武芸⁴⁴」と定義されている。

今日のテッキョンは主に足技を使う武芸で、正三角形の3つのポイントを踏むブンバルキと柔らかい曲線で手を振り回すファルゲジが特徴である。そして、蹴りを出す時に“イック！エック！”という独特の声を出すのもテッキョンの特徴である。

テッキョンはタッキョンともいい、漢字では托肩と書かれるが、語源に関しては定説がない。テッキョンのことが文献上に初見するのは1798年出版の『才物譜』においてであるが、そこではハングル文字で「タッキョン：탁견」と表記されるだけで、漢字表記はない。漢字表記は遅れて1925年の『海東竹枝』から現れる。

テッキョンが文献上に初見する『才物譜』巻6「技戯下」では以下のような説明がある。

「手搏は卞であり、角力は武である。今のタッキョン：탁견と同じである⁴⁵」

ここではテッキョンではなくタッキョンと書かれており、テッキョンが足技だけではなく、手搏、卞、角力などの素手系諸技を総合した武芸であったと考えられる⁴⁶。

また、テッキョンの漢字表記の初見である『海東竹枝』では「托肩戯」の項目のもとに次のような説明がある。

「昔の風俗に脚術があった。互いに相手を蹴って倒すのである。三法があつて最下者は脚を蹴る。善者は肩を蹴る。飛脚術ができる者はたぶさを落とす。これで仇を討ったり、愛人を奪うことをしたので官から法律で禁止された。今

⁴⁴ 韓国ブリタニカオンライン、http://preview.britannica.co.kr/bol/topic.asp?article_id=b22t2370a、2010年6月7日

⁴⁵ 「手搏為卞 角力為武 若今之탁견 手搏條 手搏同今之卞也」

⁴⁶ ホ インウク、前傾書、p.268

はこのような脚戯はなく、これをタッキョンという⁴⁷⁾

以上によればテッキョンは足技が優れた武芸であったと考えられる。また、テッキョンの継承者の1人であった金弘植の表現によると「上手い人を見ると怖かった。壁でもなんでも飛び越えた。両足で飛び上がって胸を蹴り、降りずにそのまま他の人を蹴った・・・⁴⁸⁾」といい、足技が主であったことが判る。

また、テッキョンの様子は、外国人が書いた文書からも窺うことができる。1895年に出版されたStewart Culinの『Korean games』は、テッキョンをHtaik kyen-ha-ki (テッキョンする) と表記し、足技を主に使うフランスのサバト (Savate) と同じであると記している⁴⁹⁾。

「テッキョンは2人が主に足によって行う格闘である。彼らは互いに向い合い、足を広げて立ち、相手の脚を蹴る。一方は後ろに一步下がり、第3の地点に足を持ってくる。従って脚はいつも3つの地点のどれか2つの中に立っている。さて、一步は片足に蹴りを入れることでゲームを始める。すると相手は蹴られた脚を後ろに引いて今度は彼が蹴り返す。ハイキックが許されているが、それは両手で受け止められる。その目的は手で脚を掴んで相手を投げることである。このゲームは日本にもあるが中国の広東出身の労働者は知らないそうである⁵⁰⁾

⁴⁷⁾ ホ インウク、同書、p.276

『海東竹枝』「托肩戯」「旧俗有脚術 相对而立 互相蹴倒有三法 最下者蹴其腿 善者托其肩
有飛脚術者落其髮 以此成報仇 或賭奪愛姬 自法官禁之 今無是戯 名之曰탁견」

⁴⁸⁾ 李容福、『民族武芸テッキョン研究』、学民社、2001、p.85

⁴⁹⁾ この本は当時、韓国の伝来されているゲーム95種類に関して説明したものである。また韓国のゲームと似ている日本と中国のゲームに対しても説明が載せられている。

⁵⁰⁾ Stewart Culin, 『Korean Games with Notes on the Corresponding Games of China and Japan』, Philadelphia : University of Pennsylvania, 1895, p. 39.

「XXXII. HTAIK-KYEN-HA-KI—KICKING (Fr. Savate).

Htaik kyen-ha-ki is a combat between two players, chiefly with the feet. chiefly with the feet. They take their

このCulinの説明は、3地点を移動する「ブンバルキ」の存在を示している点で注目される。なぜならこれ以前にブンバルキについて言及した史料がないからである。

しかし、Culinの説明では当時のブンバルキが今日のような正三角形の3つのポイントを踏むものであったか否か不明である。

さらにまた、テッキョンの様子は19世紀の絵画と写真からも知ることができる。

1846年に劉淑が描いた「大快図」にはテッキョンとシルムと見られる絵が描かれており、向かい立つ2人が両手を外に広げて構えている様子はテッキョンのファルゲジを連想させる。また、1890年に宣教師が撮ったテッキョン写真には、子供たちのブンバルキとファルゲジの動作が写っている⁵¹。これらの史料を総合すると、19世紀においてテッキョンはブンバルキとファルゲジを基本動作としていたことが判る。

positions with their feet apart, facing each other, and each endeavors to kick the other's foot from under him. A player may take one step backward with either foot to a third place, His feet, therefore, always stand in one of three positions. One leads with a kick at one of his opponent's legs. He moves that leg back and kicks in turn. A high kick is permitted, and is caught with the hands. The object is to throw the opponent. This game also occurs in Japan, but the Chinese laborers from Canton do not appear to be familiar with it]

⁵¹ ホ インウク、前傾書、p.275



〈写真4〉「大快図」、劉淑、1846年、ソウル大学博物館所蔵



〈写真5〉 テッキョンをしている少年達、『写真で見る朝鮮時代』、1986年

古老への聞き取りによると、日本植民地時代のテッキョンは、その公の実践が憚れたもので、秘かに伝承された武芸であった。

3. 海東剣道とサムラン

海東剣道は真剣や木剣を用いて太刀筋と型を修練する武芸である。海東剣道の起源については、海東剣道側の説明によると、高句麗時代にソルボン仙人によって創始され、その剣法が弟子たちであるサムラン（士武郎）によって伝わったとされている。さらに、サムランは日本に渡り、サムライの始祖になったという。

このように海東剣道は韓国で生まれた伝統武芸であり、日本との関係の中にその独自性と優越性を主張している。

しかし、こうした起源説は未だ史的な検証がなされていない。また、史的資料にも海東剣道、ソルボン仙人、そしてサムランと関連する記録は確認されていない現状にある。

さて、上掲の3つの武芸はいずれも、その起源を高句麗時代に求めていることがわかる。高句麗は新羅、百済と共に朝鮮半島に起きた古代の部族国家として、半島のみならず中国

の満州地方までその勢力を伸ばし膨大な領土を持った国であった。そして、その国民は勇敢な気性、武芸を好んでいたことが特徴として知られている。

こうした高句麗の特徴は、上掲のような創造された武芸にとって重要な位置づけを与えるものであった。すなわち高句麗に起源を求めることによって、高句麗と同様の強いイメージを連想させるとともに、古くから存在した韓国固有の武芸であるとの正当性と権威を強調するからである。要するに高句麗は韓民族の民族性を象徴する存在であり、上述の3武芸も、その民族性の中で生まれたことを主張する意図であった。

第3節 韓国の武芸団体現況

現在、韓国の武芸種目はその所属先によって大きく3つに分けることができる。

第1に、オリンピックや世界大会への出場を管轄する「大韓体育会」に属しているもの、第2に国民の健康生活振興を目的とした「国民生活体育会」（旧：国民生活体育協議会）に属しているもの、そして第3にそのどちらにも属さない種目である。

団体別の種目を見ると、大韓体育会には国際試合が行われる種目を中心として柔道、剣道、テコンドー、空手道、ウーシュー（中国伝統武術）それに国際試合は行われませんが韓国の古くからの武芸と見なされているシルム：씨름、テッキョン、弓道（国弓）が入っている。また国民生活体育会には剣道、テコンドー、ウーシュー、テッキョン、シルム、ハップキド：합기도（合気道とも書く、柔術を基本に打撃を使う武芸）、国武道（素手格闘と剣・棒・槍・弓を使う武芸）、総合武術（テコンドー・合気道・柔道・ボクシング・剣道からそれぞれ長所を取り出した武芸）が属している。

このように両団体には重複する種目が多く見られるが、政府関係者の言によると、大韓体育会は国際オリンピック委員会または国際競技団体総連合会から認められた種目（例外あり）として、各種目を代表する国内唯一の団体として全国に11個以上の支部を持つ組織を持つ団体、そして国民生活体育会は全国に10個以上の地方協議会を持ち、それらが全国的に連合会を結成している団体であるという、それぞれの団体が定める選定基準を満たすことが所属の条件となる。

そして、上掲2団体のいずれにも属さないものとして警護武術（警護要員養成のための武芸）、海東剣道（真剣を使い、主に太刀筋や形を修練する武芸）、ムエタイ、太極拳、

二十四班武芸（朝鮮の古兵法書である『武芸図譜通志』をもとにした武芸）、特攻武術（軍隊で敵を殺傷する目的に考案された武芸）などがある。

また、それぞれの種目には多くの団体が存在しているが、団体の数やその実態については長らく不明な状態であった。しかし 2003 年に国立民俗博物館の主導で初めて国立ソウル大学スポーツ科学研究所が韓国に現存して活動する団体に対する調査を行った。

その報告書である『韓国の武芸団体现況』には、各流派の所在地、創始者、継承体系、現代表者の履歴、流派の履歴、特徴、修練体系、重要用語、昇段体系、支部、修練者の数、事業計画などが調査され、さらに代表者の顔や道場の風景、技の写真が掲載されている。

これによると、種目と団体数は大きく分けて剣道系 25 団体、警護武道系 8 団体、テコンドー系 5 団体、テッキョン系 4 団体、合気道系 19 団体、その他 45 団体であり、合計 106 団体が活動していることが明らかになった。調査団体の選別は「文化体育観光部」（元：文化観光部）に登録されている法人、連盟、協会を最優先し、さらに数十年間活動していることが確認できる団体が選ばれたという。しかし、あまりにも小さく少人数のグループと調査に応じなかった団体は排除されたので、実際にはさらに多くの団体が存在していると考えられる。

団体の数については、文化体育観光部が 2008 年 8 月に発表した「生活体育法人現況⁵²」を見ると、武芸関連の種目は全部で 12 種目 283 団体に及んでいる。これを種目によって分類すると、剣道系 62 団体、格闘技系 13 団体、警護武道系 18 団体、武術系 57 団体、ムエタイ系 8 団体、柔道系 2 団体、伝統系 27 団体、テコンドー系 38 団体、テッキョン系 4 団体、特攻武術系 3 団体、ハップキド系 47 団体、他に 4 団体が登録されている。

このように統計資料からは武芸団体の量的増加が明らかであり、年を経るごとに新しい団体が創り出されていると考えられる。

このようにして韓国の武芸は、政府系組織に入っている一部の種目や団体を除いて、す

⁵² この報告書は、種目の分類、団体の法人名、設立日、代表者、連絡先、許可機関が記録されたものであり、地方自治体から報告されたものを文化体育観光部がまとめたものである。分類は団体名称によるものが多い。例えば種目を「剣道」とした場合、「大韓剣道連合会」、「国際海東剣道協会」など団体名に剣道という文字が入っているものが含まれている。但し「武術」の場合は、「韓国少林武術協会」、「韓国伝統武術協会」のように武術を使う団体以外に「大韓古武道協会」、「大韓太極拳協会」、「大韓空手道協会」、「大韓プロ拳法協会」など、「武術」の文字がみられない団体を含めており、分類原理が不明である。

べてが自由に活動し、政府から統制されることはなかった。団体は政府の統制がない分、政府からの金銭的援助を含めた支援も受けなかったため苦しい経済状態に置かれていた。また韓国の武芸を体系づける理論を欠く状態の下、各々の団体は個々に他との比較による自派の優越性の誇示や秘伝性の強調、論理的飛躍、日本武道の伝統を無意識的に受容する日本化、団体の性格や修練体系とは関係ない哲学的主張、そして無分別な商業化が行われることも指摘されている⁵³。

まとめ

朝鮮半島には古くから弓・矢・刀・矛・槍・弩などの武器を用いた武芸が行われていた。それは軍事目的の性格が強く、弓などの遠距離攻撃が可能な武器が優先され、三国時代には弓術や弩術、そして騎馬術と騎射術などが発達した。後の高麗時代は、手搏、角戯、角力などの素手武芸の記録も表れ始めた。そして、朝鮮時代に入ると火薬武器や新式軍隊の誕生によって素手あるいは武器を用いた武芸は衰退したが、その半面、武芸が民間に修身や娯楽の目的で用いられるようになった。近代に入ると日本の影響で、柔道、剣道、空手などの外来の武芸が定着するようになった。

現在の韓国の武芸は、軍事目的ではなく、多く修身と健康を目的とする体育の側面から実践されている。その多くの団体は大韓体育会、国民生活体育会に入っている。そして、同じ武芸種目に多数の団体が生まれ、それぞれ組織化されていることや「警護武術」、「海東剣道」のような新興武芸が創られていることも、韓国武芸の現状である。

また、本章で詳述したテッキョン、海東剣道、次章で詳しく説明が行われるテコンドーなど主な韓国武芸が、歴史的正当性と権威を自身にもたらすために、その起源を高句麗に求めていた。

しかし、その反面、根拠のない秘伝性の強調や論理的飛躍、哲学的な主張、そして、無分別な商業化は韓国武芸の問題点と指摘されている。

⁵³ 国立民俗博物館、『韓国の武芸団体現況』、2003、pp.23~28